謹賀新年

令和四年　壬寅

『人生二度なし』――という真理ほど、何人にも分かりやすいコトバでありながら、しかもこれほど広大で、かつ切実な真理は、他に無いのではないかと思います、

つまりこの「人生二度なし」とは、一切の真理の最高の結晶体ともいえましょう。

森　信三

設立 平成24年 5月15日
開塾 平成24年 9月 8日
発行 令和 4年 1月 8日
(104号)

中之島ニュース

［事務局］ 〒648-0094
橋本市三石台4-1-15
TEL 0736-38-3669
FAX 0736-38-3680
発行 學塾・中之島事務局

人間学講座
第110講

「いまこの瞬間に懸命!!」

上甲 晃先生

■「難有」は「有難う」

コロナの期間私はよく散歩をしました。桜の木を見ても、以前は「きれいだな」と思うだけでしたが、いまはどの桜を見ても「えらいな」と思います。斜面であろうがどんな場所に植えられようと文句も言わない。人間は自分の置かれた場所をありのまま受け入れられずに文句を言います。桜は文句一つ言わず、置かれた場所で精一杯咲くことに全力を尽くし、そして人を喜ばせている。若いときには気づきもしなかった、人間など及ばない桜の立派さが今では解る気がします。松下幸之助もまた八十を過ぎてから松下政経塾を創りましたが、その思いが今では手に取るようにわかるのです。辰巳芳子先生は「八十になると真理が見えてくる」と言われましたが、肉体が衰える分、精神が成熟してくる。八十年の年期を重ねないと到達できない心境があると気づけば。歳をとるということは素晴らしいことです。その意味においては、いよいよ人生も仕上げの時期、まさに本番に入ったと感じながら活動しております。

北海道の家庭学校は罪を犯した子供たちの更生施設です。その学校のチャペルの下にある文字が「難有」。人生は苦しいこと辛いことの連続です。この二字を逆から読めば「有難う」。人生に起こる難をいかに「有難う」に変えていくかが「生きる」ということだと、このコロナの期間に痛感しました。コロナという難をどう生き抜くか。難有るは有難い。松下幸之助は「志があればすべての困難はチャンス」と言った。志がなければ、困難は困難のままで終わる。つまり今のコロナ禍をいかに見方を変えてチャンスにしていくのか、ということを問われているのです。

コロナの中でも青年塾は一度も休むことなくやってきました。備えるべきは備え、やるべきことはやる。そして、嵐に耐えうる人は嵐の中でなければ育たないということを実感しております。コロナという嵐に感染することなく勉強を続けるためにはどのようにするか？を考え実践することが最高の生きた学びとなっているのを思うのです。

■ やればわかる

人間の底力とは、当たり前のことを徹底してやるときに湧いてくるものではないか。力のだし加減もそこそこ程度であれば誰もがやっている。それでは人は感動しません。平凡なことを「そこまでやるか」と思わせるくらいやってこそです。準備でも商売でも、「そこまでやるか」まで徹底することで必ずうまくいく。そこまでして初めてその場の空気が凛と変わるのです。

青年塾での合言葉の一つが「はい喜んで」。何をするにおいても、同じやるなら「はい喜んで」、いやいや引き受けてするのは命の無駄遣いです。特に人が嫌がることを喜んで行うことは運命が開けます。自ずとその人に仕事が集まってくる。変化を求めて最先端のことばかり学んでいると浮足立った生き方になってしまう。真理は平凡の中にあり。本当に大事なことは当たり前の中にあるのです。それを徹底してやることは、地に足のついた生き方ができるということであり、それが人間の底力となるのです。

一つを変えればすべてが変わる。あれもこれもと欲張ればどれも中途半端になってしまうものです。青年塾では必ず一つこれだけは徹底してやる、というものを塾生に持ってもらいます。何でもよい、たった一つを徹底することで人生は変わりだします。なぜか？それは一つを変えることで心が動くからです。「知っている人」は多いが「できる人」は少ない。知識があっても実行しなければ意味はないのです。青年塾ではこの「実践」が重要としていますが、解ってからやるのではなく、「やればわかる」とも伝えています。

■ それもまたよし

松下政経塾への出向の話があったとき、政治に関心のなかった私は、断るつもりで松下幸之助に面談にまいりました。しかし幸之助は、政治に素人だからこそよい、と。さらに、知識や経験などなくてもよいが「熱心ささえ負けなければ必ず道は拓ける」と私に言ったのです。その一言が今もなお私の人生を一貫する考え方となりました。小手先の方法論ではなく、熱意を持って当たれば必ず道は拓ける。熱心さとは本気さです。うまくいかなくなる原因のほとんどは本気さが足らない。その後十四年に渡り、政治の世界の常識には捉われないという素人の長所を活かしながら、政治家を育ててきました。今では国会議員三十名を含め現在六十名が活躍しています。これもまた「素人」という難が有難い、ことであったと思います。

「鳴かぬなら殺してしまえホトトギス」とは信長、「鳴かぬなら鳴かしてみせようホトトギス」は秀吉、「鳴かぬなら鳴くまで待とうホトトギス」は家康と言われているが、松下幸之助はそのいずれか？幸之助は「鳴かぬならそれもまたよしホトトギス」と答えました。「それもまたよし」とは、そのままを受け入れるということ。「鳴かないホトトギス」という都合悪いものを排除するだけでは、難はいつまでたっても難のままでしょう。嘆いてもどうにもならないことを嘆くのは時間の無駄、受け入れること、できれば喜んで受け入れること、そうすればあらゆる難は有難くなる。難有りを有難いにするキーワードは「はい喜んで」と「それもまたよし」と受け入れることなのです。

（抄録　中川千都子）

《感動語録集》

◆上甲　晃先生

「いまこの瞬間に懸命!!」

＊そこまでやるか！ハイ喜んで！天が見ている！
いつでもどこでも独りでも！
＊八十歳になると真理が見えてくる
＊人生の始末をつける →仕上げをする
＊難有＝いかに有り難いことにしていくか
＊一つを変えれば、すべてが変わる
＊継続は本気さの証明
＊強さはつまずき、弱さに救われる
＊聴く力は心の力
＊借りたもの（必ず返す）と、貰ったものは区別
＊万物は生成発展の方向に向かっている
＊志あれば全ての困難はチャンスになる
＊心を動かすのは簡単＝よしやるかの一言で実行
＊後ろ姿を美しくする
＊分かってやるな、やれば分かる
＊じっと目を見て相手の話を聴く
＊本気で熱心になれば、必ず道は拓ける
＊熱心さの一点があれば大丈夫
＊一流に、妥協なし
＊素直の名人は神様
＊いっぱい字を書いても学びになっていない
＊平凡で差をつけよ（真理は平凡の中にある）
＊備えるべきは備え、やるべきことはやる
＊人間には欠点があるが、考え方を変えれば長所になる

《塾生の本棚から》

［『1日1話
読めば心が熱くなる365人の仕事の教科書』
「寝る前の1ページを続けて」　清林由佳

はじめに、塾生の橋本美津枝さんに御礼申し上げます。「毎日1分でも1ページでも、読書を続けている」との橋本さんのお言葉をお聞きし、サボりがちな私は大変感動して、それ以来どんなに疲れていても、寝る前に1ページでも読書を続けています。すると、いつのまにか1冊読み終える事ができ、本に挟んだ栞が日々後ろに移動するのを見て、充実感や自信にも繋がっています。本当にありがとうございます。

今回、致知出版の『1日1話、読めば心が熱くなる365人の仕事の教科書』をご紹介します。

この本は、雑誌「致知」が42年間に取材した様々な分野の第一人者365人分のお話を一冊にまとめたものです。個々人の仕事への思いと共に、全体に共通する「生きる基本」が見えて来ます。

・今日を精一杯生きる。小さな事を毎日積み重ねる。
・昨日より良い仕事ができるように毎日徹底的に工夫する。
・失敗や悪い事は自分の責任と考える。良い事はお蔭様と考える。
・自分も周囲も大切にする。感謝する。

時代と共に環境は変わっても、生き方への基本的な向き合い方は変わらないものがあると感じます。そして塾生の皆様は、生きる基本をリアルに思い出す為の貴重な先生。ありがとうございます。

人間学講座
第111講

「現代と死生観」

執行草舟 先生
収録ビデオ放映

Q コロナ以降生活は一変したがその意味とは？

A コロナは、消費文明・物質文明・アメリカを中心とするグローバリズムの崩壊の始まりを示している。病気そのものはインフルエンザに似たウイルスに過ぎないが、扱いにおいて過度の衛生・抗菌思想は、文明や民族の滅びる手前の現象だ。かねてからその傾向はあったが、コロナによりさらに過度の防御を皆がするようになってしまった。もともと人間は病気と併存し、先祖伝来いつ死ぬかわからないなか力いっぱいその日を生きてきた。

もともと我々は自然から離れて無菌室で生きるかのような文明に向かっていたが、そこへコロナが追い打ちをかけたということだ。人生は絶対安全であり、人は幸福を目指し、人の命は地球より重いなどというヒューマニズム、グローバリズム思想のところにコロナが来たものだから世の中が過剰反応をしている状態だ。病気を決して甘くみているわけではないが、病気を受け入れ共に生きるのが人類だ。

Q かつてとは日本人の質が変わってしまったのか？

A 日本人だけではない、ヨーロッパ人も、世界中の人間が変わってしまった。要はヒューマニズムとグローバリズムの安全思想により、安全で幸福であることが、絶対権利になってしまった。そこへコロナが来て過剰反応、異常反応となった。抗菌思想などは人類の滅びる手前の証拠である。

Q コロナの体験を良い変化にすることはできるか？

A 病気と併存して生きることが、人間の宿命なのだと受け入れることができれば良い方にいくだろうが、これまでの安全幸福思想から抜け出せなければ、コロナは文明の衰退に加速をつけるだろう。人類が何千年もかけて築き上げてきた社会組織も人間関係もいま破壊されている状況を見るに、あとは滅ぶしかない。「コロナ後」の世界などないと思う。

重要なことは、新しい病気に対して人類がここまでの恐怖と異常反応、異常な衛生思想になってしまったということだ。今後も次々と新たな病気が出てくるだろうが、こうして人類は滅ぼされていくのだ。なぜ滅びるか？それは安全や幸福を権利だと思っているからだ。我々は危険と隣合わせで当たり前なのだ。

Q 幸せとは？

A 幸せとは仕合せと書き、人に仕え合うこと、人と人が愛し合うことの喜びをいう。人間関係は一方のみが仕える関係などない。武士道の忠義も、その君臣関係とは武士が殿様に命を懸け、殿様もまたその武士に人生を投げ出していることをいう。天皇と国民の関係も同様に、天皇は国民に人生を投げ出し、天皇の御稜威（みいつ）の力により、我々は力を得る。つまり我々は天皇に対して一方的に尊敬し忠誠を誓っているのではなく、そうすることにより、御稜威という日本民族の力をいただけている。お互いの関係となっているのだが、それさえ今は忘れられている。幸せというのは、そのお互いの関係のことを指し、それが愛なのだ。

Q 確実に滅びに向かう中で、人類はどう生きていけばよいのか？

A 人類文明というのは肉体ではない。肉体は魂を乗せる容れ物だ。一番重要なのは、神から与えられた使命であり、命より大切なもののために生きるということだ。これこそが人類に課されていること。それは愛だ。愛のために命を懸けて生きるというのが、人類という動物の宇宙から与えられた使命なのだ。それなのにこの人類誕生の使命を今失いつつあるのだ。肉体は魂の容れ物として二義的に重要だったのが、いまは魂を超えて一番の重要なものになってしまった。だから滅びに向かっていると言っているのだ。愛の実行をしてこそ人類であり、それ以外はみな動物だ。

Q 個性について

A 民族の魂が個性を生み出す。民族とはそもそも辿れば小さな集団であった。それは愛というものを認識することによって生まれ、やがて集団となり文明を築いていった。こうしてそれぞれの民族が生まれていった。だから個性とは民族の魂を受け入れたところにある。今の文明とは反対で、小さな民族に分かれるほどに個性的になってくる。民族性が高いほど人間的であるのに、ところが今はそれを差別と言われてしまう。

Q 魂を磨いてゆくには。

A 魂を磨くのが人間の生きる道であり、立派な魂を持って生きた人の記録が人類の歴史なのだ。だから人類の歴史に根差して、そこに近づこうとする生き方が必要だろう。そこを目指さなければ家畜と同じだ。現代はみなが家畜になっている。人類は高いものを目指し生きてきた。

Q 森信三先生は「新しい愛国心の中心は日本民族の全的信頼を回復すること」と述べられているが、どうすべきか？

A 森信三はまさに真実の人。優れた人間になろうとしたら、日本人ならば、日本民族に惚れこまなければ到底なれない。それが日本民族の証である。日本人なのに日本の歴史や日本人が嫌いであったり、天皇制を崇拝しないとしたら、その人は日本に生まれながら日本の魂を失っており、人間にすらなれない。魂だけが人間なのだ。

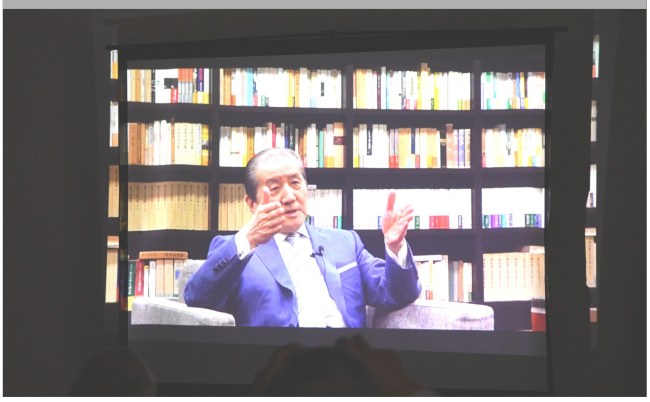
（インタビュー／抄録　中川千都子）

《感動語録集》

◆ 執行草舟先生
「現代と死生観」

＊命を守る為に生き抜くこと（宿命）
＊愛の為に命がけで燃焼して生きる
＊魂を磨く！　一日を体当たりで生きる！
＊民族の魂が個性を生み出す
＊コロナは宿命、過剰反応しすぎ
＊職業とは命を懸けるもの
＊命より大切なものの為に生きる　＝　愛である
＊幸せとは、お互い支え合うものである
＊思うことはいつか実現できる（思いつづける）
＊民族の魂とふれる
＊病気と共存するという宿命を、受け容れる
＊魂を失い肉体だけになると、もはや人類では無い
＊文化文明を学ぶと云うことは、人間になるということ
＊先人が命がけで築いてきた社会文明・人間関係が滅んでいる
＊魂を磨いていくのが人間の道
＊本を読んで共感できると云うことは、その人の心の中に種がある
＊自分の力で実現できないことは、絶対想わない
＊人間は病気と共存受容することが本来の自然形
＊人類は愛の為に命がけで生きるのが使命、肉体はこのために与えられた二次的なもの
＊職業とは命を懸けるもの
＊感応するということは、自分の中に魂があるということ

執行草舟先生講話ビデオ放映



《わたしのハガキ道》

小南昭雄

「複写はがき２５年目、
一人新聞２００号へ」

私が複写はがきを書くようになったきっかけは、東京に単身赴任中知り合った井上修さんから複写はがきの控えをいただいたことです。それ以前の私は全くはがきとは無縁の生活を送っていました。

平成８年１０月３１日、私にとって記念すべき複写はがきの一枚目は心友の井上さんに書かせていただきました。しかし毎日ではなく１ヶ月に数枚だったように記憶しています。

私が本格的に複写はがきを書くようになったのは、２～３年後の十日町はがき祭りで「はがき道」の坂田道信先生に出逢い「小南さん、ヘタでいいからね」の言葉をかけていただいてからです。その一言で気持ちが楽になりその日以来一日１信（枚）を始めることに。そして５年前からは一日３信（枚）を継続しています。

複写はがきは２５年目、令和３年１２月３１日で１６、０９２枚になります。

一人新聞については、大阪はがき祭りの時に、向島の半田正興さんから複写はがきと一人新聞は車の両輪みたいなものですよと勧められ、平成１７年５月７日に一人新聞「必然・必要・ベスト」（月１回発行）第一号を発行。タイトルの「必然・必要・ベスト」は私が信条にしている言葉で船井幸雄氏から教えていただいた言葉です。

おかげ様で令和３年１２月７日号で２００号になりました。内容は大したことありませんが一つだけ自慢できるとしたら、１６年７カ月発行日の７日に一度も遅れたことがないことです。

複写はがきに出遭い、そのご縁で一人新聞を発行することになりましたが、私にとってこの“二刀流”は人生を明るく楽しく元氣で過ごすための「生活必需品」でありライフワークになっています。感謝しています。

《人間学塾・中之島》次月日程

【2月日程】（通常より日程が変更しています）

◆日　程　2月19日（第三土曜）　受付　午後0時～

◆会　場　大阪市中央公会堂　大会議室（地下一階）

大阪市北区中之島一丁目一－二七

◆講　師　横田南嶺猊下

「禅の教えに学ぶ」

1964年　和歌山県新宮市生まれ。1983年筑波大学に入学。東京都文京区白山道場龍雲院　小池心叟老師について出家得度。1987年筑波大学卒業、京都建仁寺僧堂、円覚寺僧堂にて修行。円覚寺足立大進老師に嗣法。2010年臨済宗円覚寺派管長に就任。『祈りの延命十句観音経』『二度とない人生だから今日一日は笑顔でいよう』など著書多数。

【予　告】

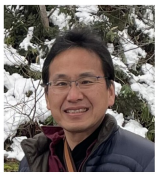
春季宿泊研修

■日程　3月12日（土）～13日（日）

■高野山

宿坊　本王院

《新規　登録塾生》



小林博文

天分塾12・13期でお世話になっておりました。大きな変化の時期、生き方の原理原則を学び直したいと思っております。皆さまとお会い出来ること楽しみにしております。

《芳信抄》

埼玉県　**山下武彦様**

寺岡語録がびっしり輝いていました。「感動語録」「参加感想集」がその素晴らしさを物語っています。森信三先生・寺田一清先生・坂村真民さん等『一日一語』がありますが、寺岡先生の一日一語もできるのではないかと思われます。

武田数宏先生のお話で、「かみさまとのおやくそく」の中に感動語録に似たものがありました。受講者の服装や態度も実に整然としていて研修の内容や受講者の姿勢がうかがわれます。

宮城県　**加藤秀夫様**

寺岡　賢先生の講義はまさに寺岡語録満載ですね。忘己報恩の心を学ばさせていただきました。知覧特攻平和記念館の板津忠正さんの業績、素晴らしいです。武田数宏先生の昭和天皇の行幸で日本の中心としての天皇を戴いていることの幸せを実感させられました。

愛媛県　**桂　誠司様**

寺岡　賢様の「今日一日を喜んで生きる」の意味を寺田一清先生との大きな別れを経験したものには、とても良く分かりますね。

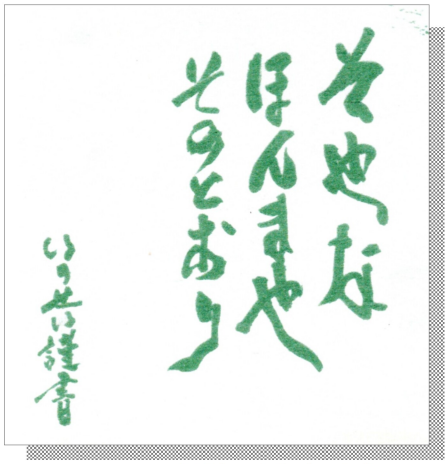
埼玉県　**大出雅一様**

寺岡　賢様の「自分さておき人様に己忘れて精根尽くす」ある寺の門前に「忘己利他」とありました。なかなか自分を忘れられず、反省することのおおい日常です。しかしここを通過しないことには、何事も中途半端になります。少しでもこの境地に近付くように精進を重ねます。「後ろからの教育」は味わうべきコトバです。教育の根本のところを語っています。

武田数宏様の「かみさまとのおやくそく」子ども向けの教育勅語は、大事なことを分かり易く説いているので良いと思います。両親の位牌を持った女の子と、昭和天皇のやりとりには胸打たれました。。

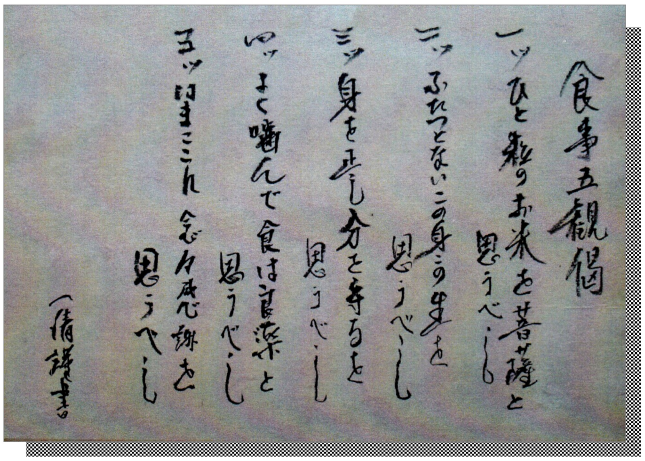
愛知県　**塚本恵昭様**

寺岡先生の「起こったことは変えられないからこそ起きたことは全て良いこと、意味があったと受け止めていく、苦しいことほど有り難い」のお言葉に元氣戴いています。



提供　塚本恵昭様

寺田一清先生墨跡



提供　近藤宏枝世話人